伊藤東涯『勢遊志』と奥田士亨について

松下道信

伊藤東涯『勢遊志』と奥田士亨について

松下道信

はじめに

江戸期の儒者は神道に関心を持つ者が多かった。例えば、理当心地神道を説いた林羅山や垂加神道を説いた山崎闇斎などはその一例である。そうした中で江戸時代を代表する儒者である伊藤仁斎は神道に対して余り関心を示さなかったようである。[1] しかし、子の東涯はその生涯において合計三回、伊勢神宮に参拝しており、神道に対して若干の接点が見られる。特に一回目と三回目の神宮参拝は遷宮に合わせての参拝であり、三回目については旅程やその際の交遊の様子が詳細に残る。『勢遊志』である。[2]

伊藤東涯（一六七〇－一七三六）[3]、名は長胤、字は原蔵（源蔵・元蔵とも）、号は東涯、また慥々斎、京都の人。古学先生伊藤仁斎の長子である。古義学を提唱した仁斎の学を継承し、紹述先生と呼ばれる。著書は多く、文集として『紹述先生文集』（以下、『文集』と略称）が残る。[4]『勢遊志』は享保十五年（一七三〇）、東涯が伊勢に行き、神宮に参拝した時の様子を漢文体で記した紀行文で、口絵二葉、本文十一葉から成る。これは『文集』には収められない。なお、これと関連する資料として、天理図書館所蔵古義堂文庫に「庚戌勢遊志日程」及び『遊勢雑誌』が収められる。[5]「庚戌勢遊志日程」

は、四月十七日から二十二日までのごく簡単な行程記録一紙で、東涯自身の手による。『遊勢雑誌』は同行した門人安原貞平によるとされるもので、その日の天気や出発時刻、また会った人物名や貰った物品などが詳細に記録されており、参考になる。

本論では、伊藤東涯の三度目となる伊勢行をまとめた『勢遊志』に従い、その詳細をたどることで、本書に表れた彼の関心の所在や影響について考えてみることにしたい。結論から言えば、この時の伊勢行は、むしろ『勢遊志』の編者でもある弟子の奥田士亨の影響によるところが大きく、東涯に大きな神道の影響をそこに見ることはできない。それでも、これが伊藤東涯と神道、ひいては当時の儒者の神道との関係を一瞥する、一つの興味深い資料であると言うことができると考えられる。奥田士亨は東涯の弟子で、東涯の『名物六帖』『用字格』『古今学変』等の出版に尽力した重要な人物である。特にこの伊勢行は奥田士亨が津藩の儒員となるきっかけとなったと思われ、士亨における東涯の伊勢行の意味についても併せて検討することにしたい。

一、伊藤東涯と『勢遊志』

一・一　旅立ちから伊勢豊原、そして鸚鵡石まで

東涯が伊勢に向かった享保十五年、東涯は六十一歳、士亨は二十八歳であった。『勢遊志』の冒頭、東涯は以下のように述べている（原漢文。以下同じ）。

予　辛卯、丁酉伊勢に遊ぶこと再び、毎に行を紀さんと欲して未だ果たさず、比歳奥田生士亨頻りに行を促し、又

た事故に阻まれ、荏苒として年を度し、今茲に庚戌四月初五、貞平・徳隣・公堅の三生を拉へて首途す。（一表）

ここから東涯が辛卯（正徳元年、一七一一）、丁酉（享保二年、一七一七）の二回、既に伊勢に参詣していたこと[6]、また、奥田士亨に催促され、庚戌歳、すなわち享保十五年四月五日、伊勢に向けて出発したことが分かる。「貞平・徳隣・公堅の三生」とは、東涯の門人安原貞平・松井徳隣・並河公堅の三人のことで、『勢遊志』の巻末にはこの三人の五言詩を載せる[7]。なお、東涯が京都を発つに当たって奥田士亨が同行したとは書かれていないが、安原貞平『遊勢雑誌』四月五日の条には、上の三人と並んで奥田士亨の名前が見える。名前を記さないのは、実質上、本書が士亨によりまとめられたことによるものだろう。

以下、『勢遊志』に従い、伊勢行の行程を確認しておこう。享保十五年四月五日黎明、東涯らは京都三乗橋から伊勢に向けて出立した。同日、江州石部駅（滋賀県湖南市石部）に宿泊。翌六日、勢州関町（三重県亀山市関町）着。門人の吉田宅に宿泊した。七日、安濃津（三重県津市）着。やはり門人の河北宅に宿泊している。八日、津城を出て、夕刻、豊原（松阪市豊原町）着。奥田士亨宅に投宿。この後、数日ここに逗留することとなる。

奥田士亨は東涯の高弟である。奥田氏の祖は佐々木高綱の子孫で小四郎晴重と言い、江州奥田庄に在住していたことから奥田氏を称した[8]。その後、越前の豊原に移り、さらに九代の孫清十郎忠重の代に南勢櫛田川のほとりに移住し、その地を豊原と名付けた。忠重の孫吉久は寛永八年（一六三一）に藤堂高次より大庄屋を命ぜられ、吉久の後は子吉則が、またその養子である士救がこれを継いだ。士亨は、士救の末子である。士救は宜休老人と号し、既に隠居しており、その後を次子の士章が継いだと言う[9]。

奥田宅での逗留は、東涯にとってなかなかに楽しいひと時であったようである。滞在時、邑人が数十人訪れ、東涯は

経書について解説したり、詩を賦したり、また、目の前を流れる櫛田川や椀山に遊び、詩を残している。

十三日には、安楽寺で休んだ後、山添村（松阪市山添町）を経て、元伊勢の一つ飯野高宮を訪れ、神山一乗寺に登った。ここでは堀口士廉の族弟の光亨から接待を受けている。士廉は士救の次男、士亨の兄で、士亨の母方の一族の堀口氏の養子となっていた。[10] その他、一乗寺で東涯は、室町時代前期の武将仁木義長の故墨を訪ねている。その後、一行は中万村（松阪市中万町）から蛸路村（松阪市上・下蛸路町）に向かい、堀口士廉宅に宿泊した。

翌十四日は雨、射和村（松阪市射和町）の家城宅に宿泊。[11] 十五日は相可村（三重県多気郡多気町）の法泉寺に至った。東涯は寺前の池やその山水に興趣を覚え、酒を飲み、詩一首を作っている。この日の宿泊は本藤養元宅。明くる十六日は射和を発ち、相可に向かった。東涯は、射和・相可の両村の家々が軒を連ねて賑わい、その間を櫛田川が流れる山水の美しさを、明代四大家に数えられる沈周と文徴明の文人画になぞらえている。

ところで、東涯は京都にいる時、壱瀬（度会郡度会町南中村。一ノ瀬川畔）に「能く人語に応ず」（三表）る鸚鵡石というものがあると聞いたとして、この時、鸚鵡石を見に行く話が持ち上がった。なお、『勢遊志』には誰から鸚鵡石について聞いたか記さないが、東涯の『輶軒小録』「鸚鵡石の事」によれば、それは「伊勢山田の祀官福島鶴渓氏」であったと言う。[12] その後、堀口光堅（光亨の兄）が鸚鵡石までの案内人を探し出し、併せて酒を用意した。一行は相可から西山・四神田（多気郡多気町）といった村を通って、右に国束山を望みつつ、岩坂を経て棚橋、そして駒野まで進んだ。この日、一行は当地の農家に宿泊した。

翌十七日、東涯一行は駒野を出立し、小萩を経て脇出村（度会町脇出）へ向かい、さらに二里ばかり進んで中村（度会郡度会町南中村）に到着。この後、一行は今回の旅の中心となる鸚鵡石を遊覧することとなる。

一・二　『勢遊志』と鸚鵡石

東涯は鸚鵡石について次のように記している（四表－五表）。

鸚鵡石は山川紛糾する地にあり、山の中腹に頽然として坐している。鸚鵡石へ至る隘路は遠く、曲がりくねり、途中、よじ登ったり、手を引いてもらったりしつつ三四町進んでようやくその麓に到着する。鸚鵡石は高さ十余丈、幅二十丈ほどで、石の西北の下部には草木が茂るが、周りに高い木は見当たらない。鸚鵡石の右側百歩ほど離れたところにやはり岩があり、その上は数人が座れる。また、二つの石の中間には平らな場所があり、右側の石の上で人がものを言ったり、歌ったり、また太鼓をたたいたりすれば、それらの音が平らな場所にいる者にも軽重緩急全く同じように聞こえる。その音は幔幕を隔てたようで、岩の左角の方向から聞こえると言い、東涯は、これは鏡のように鸚鵡石に音が反射したものかと推理するが、ただし笛の音だけは反応がないのは奇妙であるとしている。また、この鸚鵡石は四五十年前まで木々に覆われ、人に知られていなかったものの、近年、名石とされるようになったと記す。そして、『春秋』左伝昭公八年に見える、晋の魏榆の石がものを言ったという故事や、唐の鄭常『洽聞記』の響石の記事（『太平広記』所載）、また、蘇軾「石鐘山記」（『蘇軾文集』巻十一）などと比し、「造物の妙 真に測るべからざるなり」（五表）と賛嘆している。

『勢遊志』を通観すると、伊勢行においてこの鸚鵡石を見たことは最も記憶に残る一事であったようである。伊藤東涯の鸚鵡石を詠んだ詩は十六句から成る五言詩で、『勢遊志』に見える東涯の詩十一首中、最も長い。また、巻末には同行した四人の弟子、すなわち安原貞平・松井徳隣・並河公堅、そして奥田士亨による鸚鵡石を詠った詩が付されている。安原・松井・並河は五言律詩、士亨は二十四句からなる七言詩に「観鸚鵡石」という詩序が付く。士亨の詩序は、勢州には鏡石・葛籠石といった天地の始まりより存するという八奇石があり、鸚鵡石もそれに属するという俗説を紹介した上で[13]、東涯を豊原の自宅に招いた後、堀口光堅と郷人による勧めにより見聞に及んだという経緯を記す。そして、

「実に天壌の間の暁すべからざる者にして、当に此の行の第一の奇観に属すべし」（十裏）と述べている。士亨には、おそらくはこの時の作であろう、やはり「鸚鵡石」と題する七言絶句が、士亨の詩文集である『三角集』巻二に見える。[14]

東涯一行が鸚鵡石を遊覧したことは、当時の人々の鸚鵡石への興味をかき立てたようである。『輶軒小録』「鸚鵡石の事」には、東涯帰京後の顚末について次のように述べる。

其後伝播やゝひろく、桑原菅長義郷のうはさに因りて、詩記等を院の叡覧に入る時に、霊元帝御左院にて、画師山本宗川に仰つけられ、[15]屏風に図せられ、其記を書き付く。

桑原菅長義とは、公卿五条為庸の子、菅原長義（一六六一－一七三七）のことで、霊元院の下で当時の歌壇を支えた人物。[16]山本宗川（一六七九－一七六〇）は狩野派の画家で、名守房、通称数馬、別号探釣斎のこと。すなわち、菅原長義は東涯が鸚鵡石を見たという話を聞き付け、「詩記等」を霊元院の叡覧に供し、その際、画師山本宗川に屏風に鸚鵡石を描かせたことが分かる。[17]天理図書館所蔵古義堂文庫の「鸚鵡石図詩」二幅がそれであろう。[18]

『勢遊志』には、巻頭に鸚鵡石を描いた「勢南勝境」図が二葉にわたり置かれ、「宗川法橋写」と記されている。これは「鸚鵡石図詩」を刊刻したものであろう。また、『勢遊志』巻末の奥田士亨の跋文には次のとおりある。

余師に請ひて遊郷の次、師友作る所の詩篇梓して同好に伝へ、他篇の未だ修正を経ざる者は、姑く之を闕く。板は盧橘堂に在り。庚戌仲夏士亨誌（十一）

ここから『勢遊志』が仲夏五月中にまとめられ、上梓されていることが分かる。となれば、東涯帰京後、一月以内に、「詩記等」の稿本が霊元院の叡覧に供され、それと合わせて山本宗川の図画が制作されて刊行されたということになろうか。もっとも図版は後補かもしれない。

宮中に知られることによって鸚鵡石が一躍有名になったことは諸書にも記される。安岡親毅『勢陽五鈴遺響』五（天保四年［一八三三］。『三重県郷土資料叢書』第八十五集所収、三重県郷土資料刊行会、一九七八）度会郡巻一、及び荒井勘之烝『勢国見聞集』（嘉永四年［一八五一］。松阪市史編さん委員会『松阪市史』第八巻［蒼人社、一九七九］所収）巻十六「名石之部」度会郡は、共に『輶軒小録』『勢遊志』により鸚鵡石について説明し、人気を博したことを記している。

一・三　神宮参拝、講説、そして帰京

伊勢の旅の続きに戻ろう。

四月十七日、鸚鵡石を見た一行は駒野まで戻り、宮川を舟で下った。夕刻、山田の渡しに到着。先に見た福島鶴渓の子、福島末済（一七一一－一七七〇）の迎えにより同宅に宿泊した。[19] 福島鶴渓は伊藤東涯に、末済は蘭嶋に師事した神宮祀官であった。福島家への宿泊は、一族が御師であったこととも関係しよう。

翌十八日は豊受宮（外宮）を参拝し、[20] 東涯は「去年遷宮し殿宇一新す」（六表）と述べている。初めて神宮を訪れた時と同様、遷宮に合わせての参拝であった。次いで東涯は外宮の豊宮崎文庫の講堂で『孟子』四端章を講義し、豊宮崎文庫の蔵書の充実ぶりを伝えている。

十九日には宇治へ向かい、内宮の祭主家であった藤波氏精の屋敷にて休んだ後、内宮を参拝し、朝熊山に登った。東涯は二十年前の参詣の際にも朝熊山に登っている。[21] 明くる二十日には二見浦に到着し、「尾参二州の諸山 海霞島霧の中

に漂渺として、猶ほ二十年前の見る所のごとし」（六裏）として詩一首を詠んでいる。[22] 二十一日は久保倉右近を訪ね、翌朝、福嶋末済のもとを辞し、奥田士亨宅のある豊原へと向かった。久保倉右近は、路草と号した俳人久保倉盛僚（一六七〇～一七一三）の子盛紹（一六九八～一七七三）のことであろうか。[23] 二十二日からしばらく東涯は豊原に逗留し、上で見た奥田士章や士律ら奥田士亨の一族と交流を深めている。[24]

二十八日、ようやく豊原を出発した東涯らは津城下の河北宅に宿泊。二十九日は乙部村（三重県津市乙部）の浄明禅院に遊び、「府の世家の吏士」（七）数輩がやって来て、『論語』数章を講説し、そのまま浄明禅院に宿泊した。以下、東涯はしばらく城下にあって高位の吏士と交わり、儒学を講じている。五月一日には、藤堂侯の公族の某家を訪ね、雨に阻まれるも、三日には国老の家でやはり『論語』『孟子』数章を講じている。『勢遊志』には見えないが、『文集』巻三十に見える「人参画賛」もこの時詠まれたものであろう。[25] これは「津城医員宮崎氏の求」（七裏）めによるものである。

翌四日は、門人の河北氏に見送られつつ津を発ち、窪田から関に向かった。関では行きにも宿泊した門人の吉田氏が出迎えた。東涯はこの門人のために扇に詩一首をしたためている。[26] 五日には関を発ち、水口駅に到着。この日は端午の節句に当たり、家々の門に菖蒲を挿し、彩幡を立てており、東涯はこれをあたかも「都下の風俗」（八表）のようだと記している。さらに一行は大津に至り、江左更白宅で食事を済ませてから帰京した。四月五日に京都を出立してからちょうど一月にわたる行程であった。

以上、見てきたとおり、『勢遊志』では鸚鵡石を中心に、伊勢神宮の参拝、朝熊山や二見浦の探勝、それと併せて外宮豊宮崎文庫における講義や、津藩の公族や吏士の前で『論語』『孟子』などを講義している様子が記される。

ではこの背後にある東涯の態度とはどのようなものであったのであろうか。東涯は『勢遊志』の最後に、一月にわたる伊勢行の間、目にした山海の勝景の数々、厚い歓待については全てを記すことができないほどであったと述べている。

各地では設宴が続き、面識を求める人が満ちあふれたが、それらに対する東涯の感想は以下のようなものであった。

皆吾が先人の道を景らかにして予が異聞有らんことを意ふ、亦た諸人の宿道郷方の誠意ならずや。（八裏）

「宿道郷方の誠意」とは正道や仁義の道へ帰せんとする気持ちのこと。すなわち、東涯のもとにやってきた人々は「先人」である父仁斎の道を明らかにしたいと考え、東涯のもとに新たな知見を求めてやってきたのであり、それは人々が仁斎の説く古学、そして儒教へと回帰する気持ちの現れであると考えているのである。結局、人々を儒教へと導くことこそ彼の本懐であったと評することができよう。

ところで、注意したいのは、東涯に伊勢行を勧めた奥田士亨は、伊勢行の翌年、津藩の儒員として召し抱えられているという事実である。津藩では、それまで藤堂高虎が藤原惺窩門下の三宅島（一五八〇－一六四九。字亡羊、号寄斎）や如竹山人といった儒者を顧問としたのを先蹤として、二代高次、三代高久の時代には三宅道乙（一六一四－一六七五。鞏革斎。三宅島の養子）ら朱子学者が、また、追って実学的学風を持つという佐善元恭（号雪渓）といった儒者が儒員を務めていた。こうした中、奥田士亨が儒員として登用されて以降、津藩では古学が中心となっていく。[27]

士亨の儒員採用がどのような経緯で行われたのかについては明確な証拠が残るわけではない。しかし、時期から見て、やはり東涯によるこの時の高官との交流が大きいものと推測しても良いのではないかと思われる。[28] 次節では、士亨の仕官に関する東涯の文章を取り上げ、士亨の仕官と伊勢行との関わりについて若干の考察を加えてみることにしたい。

二、奥田士亨と『勢遊志』

二・一　奥田士亨について

まず先行研究に従い、奥田士亨について簡単に確認しておきたい。[29]

奥田士亨（一七〇三－一七八三）、字は嘉甫、通称宗四郎、後、清十郎に改める。号は蘭汀、三角。古稀に藩主から南山の号を賜る。伊勢津領内豊原の大庄屋子救の末子として生まれる。最初、十四歳にして宇治山田の表叔（母方の叔父）の柴田蘋洲に学ぶが、[30]その際、「書を読まば宜しく天下第一の人を師とすべし」（『先哲叢談』巻八「奥田三角」第一条）と言われ、伊藤東涯に師事。十一年その門にあって入室弟子の位置にまで至った。

享保十六年（一七三一）、東涯と伊勢行を伴にした翌年、二十九歳で津藩の儒員となる。宝暦三年（一七五三）、藩主高朗の命により『明史』を校閲し、礼服を賞与される。六十一歳の時、藩吏となっていた兄の士礥が職を辞したことを受け、禄百五十石を受ける。明和七年（一七七〇）六十八歳の時、江戸に滞留すること九箇月、安永元年（一七七二）七十歳にして鑰役次詰となり、同三年、中間詰に進む。同五年、七十四歳にして致仕。その後、子士元が職禄を継いだ後も、藩主高嶷は士亨父子に対し隔日に登城させたと言う。仕事は慎み深く、第六代藩主高治・第七代高朗・第八代高悠・第九代高嶷四人の君主に仕えた。五十年間にわたり過失なく、歴代の藩主からの恩顧も篤かった。天明三年（一七八三）五月四日八十一歳にて歿。私謚、簡粛先生。門人は八百人に及ぶ。二十二歳にして東涯の『名物六帖』を校訂したほか、『用字格』『古今学変』等の出版に尽力し、東涯の子の東所を経済的に扶助した。著書に詩文集『三角集』五巻、写本として『蘭汀文集』が残る。

また、北宋・兪汝尚の「題三角亭」という詩に感じ、「三角亭詩」を作って「人間交際謙損を重ず、天道循環満虧を警む」（『三角集』巻一、四十七裏）と詠み、三角は四角の半分であり、「盈つれば欠く」という自戒を込め、三角と号した。また自らも三角亭を作り、文房具からもろもろの雑器に至るまで三角形のものを愛好したことで知られる。

士亭に関する資料としては、三熊花顛編『続近世畸人伝』に士亭の伝があり、「三角亭記」「三角亭詩」「寿碣碑」が付される。[31] また、原念斎『先哲叢談』巻八にも士亭にまつわる逸話七条が収められている。その他、三重県松阪市豊原町にある奥田氏の墓所、枕山墓地の士亭の墓に「簡粛先生碣」、津市浄明寺には「南山先生寿碑」などが残るが、利用しやすい形での全文翻刻や公開が望まれる。

二・二　奥田士亭の儒員仕官と東涯

奥田士亭が津藩の儒官として召抱えられ、伊勢へ戻るに際して、東涯は「贈奥田嘉甫還勢序」（『文集』巻二）という文章を残している。明確な証拠というわけではないが、『勢遊志』に見える東涯の伊勢行が奥田士亭の仕官につながったことを窺わせる文章であると思われるため、以下に簡単に確認しておきたい。

> 予客歳勢州に詣で、豊原を過ぎ、奥田生の家に館す。洞津の府に隷して近し。暇なるときは則ち生（＝士亭）と偕に邑里を歴し、山川を攬し、其の人物を詢ぬ。其の土敞くして其の民阜し。其の府の士大夫多く学に嚮ひ、或は予を延きて舎に至り、経旨を咨叩し、古道を研味すること訢訢如なり。意ふに或者以て開くこと有りて之に先んづ、故に応ずるの速かなること有り。（二十一）

文頭に「客歳」、すなわち去年とあることから分かるとおり、この文章は伊勢行の翌年、享保十六年（一七三一）に書かれた。ここには豊原の奥田士亨の屋敷に泊まったこと、時間があるときには士亨と周囲の山川や名士・名所などを訪ねたこと、さらには、当地の人々が「経旨」「古道」を好み、東涯に講学を請うたことなどが述べられる。「古道」は古学を指すであろう。これは『勢遊志』で記されている当時の光景そのものである。洞津は安濃津とも言い、津藩のことである。続いて、士亨について述べる。

生予が塾に学ぶこと十年所（ばかり）。学勤にして才茂なり、宜しく碌碌為るのみなる者たるべからず。頃ろ府檄を蒙りて、記室の任を膺（う）け、将に辞して還らんとするに、言を予に丐む。（二十一裏）

士亨は十年ほど東涯の下で学び、勤勉にして才能ある人物であるがため、藩命により「記室の任」を受けることとなった。そこで帰郷するに当たり、文章を東涯に請うたと言う。「記室」とは、後漢に置かれた官名で、章表、書記等を掌ると言う。ここでは、士亨が儒官として採用されたことを言うのであろう。

この後、東涯は、天下太平となって百十数年が経ち、当初、尚武の風に凝り固まっていたものの、そうした中、仁斎の門人たちは四方へと散らばり、儒教を広め、今や「右文の世」、すなわち儒教が尊ばれる時代となったと言う。

今 生右文の世に丁（あた）りて、其の地に生じ、其の人に熟す。慫慂することの已に久し。其の邑の士大夫、亦た其の説を悦ぶ。推轂して以て学職に署するに至れば、則ち其の将に先子の道を倡して、以て之を其の君に進め、之を士大夫に告げ、以て郷曲閭閻の間に及ぼさんとす。道とは先子の道に非ざれば、乃ち聖人の道なり。聖人の道に非ざる

や、乃ち天地の道なり。天地の道を以て之を人に告ぐときは、則ち凡そ天地の間に在る者、其れ孰か従はざらん。苟も之を躬にすることの篤くして、之を用ゐることの久しきときは、則ち一変して道の効に至らん。豈に期すべからざらんや。是れ生に望む所なり。（二十一裏―二十二表）

士亨は「右文の世」に巡り合わせ、人々の「推轂」、すなわち推挙により学職に就くことができた。そうであるからには、仁斎の道を君主、士大夫、そして郷里の人々へと広めよ。仁斎の道は聖人の道であり、天地の道である。それゆえ、この道は誰もが従うべきものであり、それがきちんと行われれば道へと到達しようとして、これを士亨に期待すると述べる。ここでは当地の人々の「推轂」により儒官となったと書かれてはいるものの、『勢遊志』に見える状況から見て、これに加えてやはり東涯の存在が士亨の仕官に結びついたと考えてもよいだろう。『文集』巻二は仕官等で東涯のもとを去る門弟への文章が多数収められるが、伊勢行のような東涯の個人的な体験を記す例は他の文章には余り見られない。

このほかにも伊藤東涯の亡くなる前年の享保二十年（一七三五）には、「奥田嘉父氏 勢州に宦し此を寄して以て東に代ふ」（『文集』巻二十六、二十九）と題される詩が残る。嘉父とは嘉甫のことで、士亨を指す。東涯は士亨からの手紙に次のような詩を送っている。

間関して嘗て到る海南の村、香稲嘉魚頻りに樽を倒す。
古学堂中多くの歳月、水哉閣上晨昏を共にす。
是れ自り羽林道術を崇め、還た欣ぶ束帛の丘園を賁（かざ）るを。
斯文千歳未だ曾て墜ちず、燭を剪りて君と細論を要す。

「海南の村」とはおそらく伊勢行で巡った様々な村を指すだろう。その折、「香稲嘉魚」に舌鼓を打ち、酒「樽を倒」し、賞味した。古学堂は古義堂のこと、水哉閣は東涯の軒号で、共に士亨が長い歳月、学問に励んだ場所である。そして今や津藩の儒官として君主以下、武士たちに儒学を講ずる身となった。「羽林」は禁軍の別称で、ここでは津藩の武士たちを指そう。「道術」は儒学のこと。「束帛の丘園を賁る」は、『易』賁卦の言葉を踏まえ、郷村に絹五匹の礼物を送ること。郷里に錦を飾ることを儒教風に言い換えたものか。「斯文」は礼楽や儒学のことで、詩を結ぶに当たり、東涯は千古不変の儒学についてまた夜更けまで君と議論がしたいものだ、と詠っているのである。仕官した弟子への喜びにあふれる詩と言えるだろう。

まとめに代えて

東涯の三回目の伊勢行をまとめた紀行文『勢遊志』では、鸚鵡石を中心に、伊勢神宮・朝熊山・二見浦などを参拝・遊覧した様子が記され、一部伊勢御師や俳諧の世界とも接点が見られる。ただし神宮参拝はあくまで記事の一部にとどまり、『勢遊志』の出版後、東涯の朝廷での知名度もあずかって有名になったのはむしろ鸚鵡石であった。併せて『勢遊志』には、外宮豊宮崎文庫における講義や、津藩の公族や吏士の前で『論語』『孟子』などを講義している様子が記され、仁斎の学に基づく儒学を広めることこそ東涯の関心の中心であったことが見て取れる。こうした儒学の講義を通した交流は士亨の儒員として仕官する機縁となったものと思われる。

ところで、士亨の屋敷があった豊原からほど近い神山にある一乗寺の西側の参詣道の中腹には、鏡石と呼ばれる一・二メートル程度の円形の石があり、そこには伊藤東涯の詩と士亨の文章が刻されている。『文集』『三角集』共に採録し

ないため、最後に見ておくことにしたい。[32] ここには仕官を終えた晩年の士亨の気持ちが込められていると思われるからである。

伊藤長胤

修林は回磴を夾み、香刹神山に倚る。
未だ天下を小とするに至らざるも、已に世間を超ゆることを知る。
雲深くして白足に参じ、泉湧きて蒼顔を照らす。
行きて奇絶を窮めんと欲し、此の途更に往還せん。

享保庚戌四月十三日師に従ひて此に遊ぶ。詩有り毎に念ふ石を路に勒し、倚てて磨崖碑に擬せんと。近田時、堀木富、中野明慫慂すること惟れ勤たれば、遂に智厳和尚に乞ひて四十九年の志誠を償ふを得たり。人以て無寿たるべからざるなり。安永丁酉夏五望

津　奥田亨書　時歳七十五（花押）

先に置かれる五言詩は享保十五年四月十三日に一乗寺に遊んだ際に詠んだもので、『勢遊志』に収められる。[33] 後ろに付された士亨の文章は、師である東涯の詩を磨崖碑にした経緯を述べる。すなわち、この東涯の詩が享保十五年四月十三日に一乗寺に同行した際に詠まれたことを述べた上で、長らくこれを石碑にしたいと考えていたところ、周囲から勧められ、智厳和尚に要請して四十九年に及ぶ宿願を達することができたと言う。[34] 智厳和尚は時の一乗寺の住持であろう。

この石碑は、正に詩に詠う「修林に夾まれた回磴」、すなわち深い林に囲まれたつづら折りの石階段の途中にある。

文中に見える近田時、堀木富、中野明とあるうち、後者二名については、『南山先生八十寿歌詩集』に見える堀木勝富、中野正明のことであろう。近田時については不明。『南山先生八十寿歌詩集』は、奥田士亨八十歳を祝するために作られた和漢詩集で、孫の奥田士廸により天明二年（一七八二）に編まれた。堀木勝富、中野正明はここにそれぞれ漢詩一首を収めている。[35]

「安永丁酉夏五望」は安永六年（一七七七）五月十五日。この時、士亨は七十五歳であった。前年には儒員の後に務めた藩吏の役職も辞している。士亨がこの時我が身を振り返って、その地位にまで至ることができたのはやはり師東涯の存在であり、直接的には士亨が仕官するに当たって大きな役割を果たした伊勢行であったことを感じただろう。鏡石に刻まれる東涯の詩は、東涯の門下生として、また、郷里に錦を飾る思い出として、何よりも士亨にとって大切な詩であったのである。士亨における『勢遊志』の位置が窺われよう。

註

（1）大谷雅夫「伊藤仁斎の「伝統」―聖人の道と歌道・神道―」（『文學』第五十号、岩波書店）では、仁斎は神道説について一貫して拒絶・黙殺していると言う（十七頁）。

（2）『勢遊志』は伊藤東涯著・奥田士亨編、享保十五年京師書肆野田弥兵衛刊本を用いた。神宮司庁編『神宮参拝記大成』（増補大神宮叢書十二、吉川弘文館、二〇〇七。もと一九三七）に翻刻と解説がある。

（3）伊藤東涯については、吉川幸次郎「伊藤東涯」（『吉川幸次郎全集』第十七冊、筑摩書房、一九六九）、伊東倫厚『伊藤仁斎・附伊藤東涯』（叢書・日本の思想家10、明徳出版社、一九八三）などを参照。

（4）『文集』は、『紹述先生文集』（近世儒家文集集成第四巻、ぺりかん社、一九八八）所収天理図書館古義堂文庫本を用いた。

（5）『遊勢雑誌』は、天理大学附属天理図書館編『古義堂文庫目録・復刻版』（八木書店、二〇〇五）では『遊勢雑記』に作る。だが、表紙に『遊勢雑誌』と記すことから、本稿では『遊勢雑誌』に統一する。

（6）古義堂文庫には、一回目の伊勢行の草稿である「辛卯勢遊志稿」が収められる。

（7）安原貞平は、字伯亨、号霖寰・省所。信濃上田藩士。安永九年没、享年八十三歳。『文集』巻二に「贈安原伯亨氏筮仕信之上田序」がある。弟の方斎は伊勢久居の藩儒となっている。松井徳隣・並河公堅については不明。

（8）以下、奥田氏の経歴については、津市教育会『津市文教史要』第一篇「文政建学以前に於ける学事概況」第四章「古学の勃興」（大和学芸図書、一九八〇。もと一九三八）による。

（9）士救については「享保乙卯、齢躋七十、子弟開宴、祝之投贈詩歌者百有余首、其為人所親頼如此。其年夏仲罹病、八月廿六日卒」（「宜休斎奥田了翁墓碑」）とあり、享保二十年（一七三五）に七十歳で没している。『文集』巻三十「鶴契齢」に「勢州奥田氏乃翁七十賀」とあり、同詩も士救の古希に合わせて作られたものであろう。乃翁は了翁の誤りか。「宜休斎奥田了翁墓碑」は伊藤蘭嵎によるもので、三重県松阪市豊原町にある枕山墓地にある。「宜休斎奥田了翁墓碑」は田中里史氏の翻刻による。

（10）「次曰士廉見養子堀口氏、遂冒其姓」（「宜休斎奥田了翁墓碑」）。

（11）『文集』巻六に「勢州射和家城氏端研記」が見える。

（12）福島鶴渓（一六七四－一七三三）は、川端義夫編『校訂伊勢度会人物誌―付録索引並墓地図―』（伊勢印刷工業、一九七五）、『考訂度会系図』巻八（神宮古典籍影印叢刊編集委員会編『神宮禰宜系譜』［神宮古典籍影印叢刊5－1］、八木書店、一九八五）によると、本名を末茂、号鶴渓、一号竜駒。また、新四郎、造酒とも称す。『文集』巻二十五「中秋鴨河水亭賞月」に見える伊勢人の門人福島は彼を指そう。同詩が詠まれた正徳元年は東涯の第一回目の伊勢行の年に当たり、この時に詠まれたものであると思われる。なお、『輶軒小録』は、日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期第二十四冊（吉川弘文館、一九七五。もと、

一九二九）所収大田南畝書写本を用いた。

(13)「吾州度会県壱瀬谷有鸚鵡石、俗伝、洪荒之世勢州有八奇石、余纔記鏡石葛籠石、鸚鵡石亦係其一」（十表）。鏡石は伊勢市宇治今在家町五十鈴川上流、葛籠石は伊勢市中之町にある。なお、『勢国見聞集』巻十六「名石之部」の巻末には、荒井愚意「八奇石の論」があり、士亨の言う八奇石はあくまで俗説に過ぎないと批判している。

(14)「迂曲沿渓十里程、巌墻千仞与雲平、咲言歌曲洋相応、錯被人呼鸚鵡名」（巻二、十二裏）。なお、『三角集』は、掃水燕傖（奥田士亨）著宝暦十年（一七六〇）刊本を用いた。『松阪市史』第七巻（蒼人社、一九八〇）に翻刻と解説がある。

(15)「山本宗川」は『日本随筆大成』所収本は「山本宗仙」に作るが、国立国会図書館所蔵『東涯先生輶軒小録』に従い、改めた。

(16) 蔵中スミ「霊元院歌壇と菅原長義・勘解由小路韶光―付・菅原長義・勘解由小路韶光作品年譜―」（『親和女子大学研究論叢』第二十三号、神戸親和女子大、一九九〇）参照。

(17)『文集』巻二十六に「享保庚戌夏、詣勢州観鸚鵡石題詩、爾後蒙院宣、御屏写進侍中詹事藤公、辱賜一律見賀」（二十三裏）という答詩が見える。

(18) 現在、閲覧不可のため、未見。なお、『古義堂文庫目録』には「鸚鵡石図詩」に「享保十五年庚戌九月伊藤長胤頓首拝題」とあると言う。『輶軒小録』に言う「其記を書き付く」と言うのがこれに当たるか。

(19) 福島末済は、野田弥兵衛刊本では「未済」に作るも、神宮司庁編『神宮参拝記大成』により改めた。「末」は福島氏で用いられる通字である。なお、『校訂伊勢度会人物誌』『考訂度会系図』によると鶴渓（末茂）の長男とする。

(20) 野田弥兵衛刊本では豊受宮（六葉表）と内宮（同裏）の上はそれぞれ空格となっている。

(21)『文集』巻二十八に正徳元年の詩として「登朝熊岳」が残る。

(22)『文集』巻二十三に正徳元年の詩として「遊二見浦」が残るほか、巻二十五にやはり同年の詩として「次鶴渓詞伯見示韻」があり、「二見浦」の語が見える。

(23)『校訂伊勢度会人物誌』による。久保倉盛僚については浅野晃「芭蕉と伊勢俳人―足代弘員・竜尚舎・路草久保倉右近―」(『皇学館大学紀要』第二号、一九六四)参照。

(24) 奥田士律は、字惣右衛門、享保十六年卒、享年五十七歳。士亨の従叔父。『三角集』巻五に「恕軒府君碣銘」(五表―六裏)が見える。

(25)「徐市採余子孫繁、又聞良品自三韓、要知徴物関民命、五葉図成仔細看」(七裏)。

(26) 基本的に『文集』は『勢遊志』と重複しないよう編纂されているが、同詩は『文集』にも採録されている。「享保庚戌詣勢州、将帰宿于関町吉田生宅草卒題扇頭云。多日嘗相識、討論傾肺傷、同来同投宿、忘却在他郷」(『文集』巻二十七、十一表)。

(27) 津市教育会前掲書「古学の勃興」を参照。

(28)『遊勢雑誌』には多くの具体的な人名が記録されており、今後更なる分析が可能かもしれない。

(29) 奥田士亨については、津市教育会前掲書第四章「古学の勃興」、梅原三千・西田重嗣『津市史』第三巻(津市役所、一九六一)第九編「伝記」第四章「学者」6「奥田士亨と彭」を参照。その他、角田夏夫『三角亭物語』(北方文化博物館、一九八五)、山田一生『木内石亭を巡る奥田士亨と谷川士清の交遊』(夕刊三重新聞社、二〇一七)も参考にした。

(30) 柴田蘋洲については、『三角集』巻五に「蘋洲先生墓碣銘」が残る。それによれば、延宝六年(一六七八)四月生、享保十七年(一七三二)七夕卒。享年五十五。浅見絅斎に朱子学を学ぶと言う。

(31)「寿碣碑」は亀山聿三編『近代先哲碑文集』第十四集(夢硯堂、一九六八)にも収められる。

(32)『勢国見聞集』巻十六飯野郡「鏡石」に載せる。ただし一部字句を改めた箇所がある。

(33)『遊勢雑誌』は帰路に当たる四月二十四日・二十五日条に同詩を収める。また、字句も若干異なり、推敲のあとを窺わせる。

(34) 四十九年前は士亨二十六歳となり、東涯の詩が書かれる前となる。あるいは士亨の単純な計算間違いか。

(35) 朝倉治彦「南山先生八十寿歌詩集」(『四日市大学論集』第十一巻第二号、一九九九)参照。なお、ここに本居宣長の名前が見えることは士亨の交遊を考える上で注意される。